



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
1 - 3 - 1



『碧葉国の七恋歌』

(発掘作業一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

『碧葉国の七恋歌』

翠林 (すいりん)

- 一の王子、見合いの宴を敵前逃亡する。
- おなじく脱出組の星華蘭と意気投合、婚約者に定める。

雪宴 (せつえん)

- 武芸に長じる星華蘭、婚約者である一の王子に「あれは女じゃない」と言われ愕然とする。
- 星華蘭、髪をのばし学舎に精勤するが性格がきつくなる。

蒼天 (そうてん)

- アルゼワ国が新興宗教にかぶれて軍備を固め、近隣諸国をおびやかす。
- 二の王女に求婚の使者がくる。
- 不戦・開戦をめぐるフェンテル王家の外交政策ゆれる。

華苑 (かえん)

- 一の王子に先陣の命が下り、王子、副将として星華蘭に参陣を要請する。
- 「女の身でそのようなこと」とつっぱねる星華蘭、大喧嘩のすえ王子と和解する。

二、雪宴

つまるところ、つるしあげというものをくらっていたのだ、彼女は。

七家のうちとはいえども席次の低い航家の、それも三男坊のそのまた息子とあっては市井の子供と変わらぬ。

(※ 王家の家系図と、  
成人後の色っぽい(笑)「神妃將軍・星華蘭」の絵が  
描いてあるんですけど.....、省略 ※)



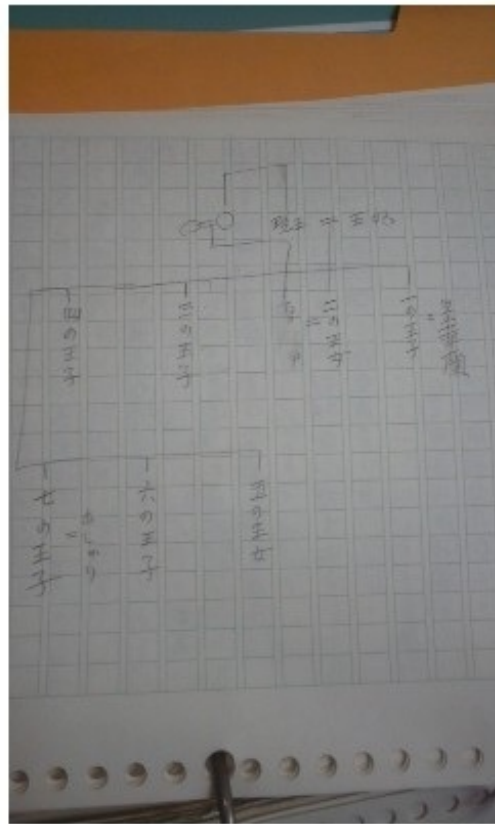
(神姫将軍・星華蘭)

---

(神姫将軍・星華蘭)

2016年6月9日 リステラス星圏史略 (創作)





『天碧（あお）き星よりの歌』（着筆1991年、秋）の続き

2006年6月18日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#) [コメント（1）](#)

まだ恋もせぬ十四のうちから婚約者を選べとは、けっこう無理な注文である。

亡くなった前王にかわって父が位（くらい）をつぎ、組閣にあたって王太子の女婿にあたる者はあらかじめ要職から外しておくのが国のならわし。とぼっちりを食ったのだ。必要性を頭では理解していても、やはりかなりな難題である。

だいたい、理想の年齢差とされる三つ四つ下の姫君たちといえば胸も腰も豊かな曲線もあったものではない、まったくの子供である。

その先どう育つかもわからない。

何十人つれて来られようと初対面の少女たちに人生かけろとは絶対無謀だ実行不可能だ。

自分本位な論理を展開してひとりうなずいた王子は見合いの宴を目前に、侍従どものすきをついで三十六計を窓から敢行する。

大事にされすぎた王宮の庭の巨樹たちは繁茂しまくって梢のなかは緑の迷宮。

そこでばったり、運命にでくわすとはまさか思いもせずに。

姫さま危ない止（や）めて下されと次女の悲鳴があがる。

ふってきたのは星家の香蘭。枝ふみはずして王子の腕へ。

—《イルダニアの七公子》—

フェンテル王家の七恋歌

◎ 隔月刊COBULT、  
百～二百枚・一単位、要購入チェック、

《フェンテル王家の七恋歌》

- 舞台は特に固定しない、
- つなぎとして正体不明の二人連れ、
- 一の王子妃 …… 星華蘭の雅歌
- 七の王子 …… 学舎の恋歌
- 五の皇女 …… 詩人出奔

尊(トキ)真扉

朝(トキ)真扉

雪樹臣

雪世臣

樹神

朱臣

二臣

精靈

亜樹

亜主

亜朱里



『 (無題) 』 (「H.01.02.03」以降)

---

[『 \(無題\) 』 \(「H.01.02.03」以降\)](#)

2006年6月21日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\) コメント \(1\)](#)

.....イハウルの樹の葉は広くて厚く、まだ朝露の乾かぬうちに拾いあつめて湿らせた布でくるみ、日影のひつに入れて保存する。

その日の間に石筆で描いた文字は、堅く乾かした枯れ葉の上に黒く刻み記されて、けしてその色の褪せることはなかった。

『闇の左手』 (違っ...

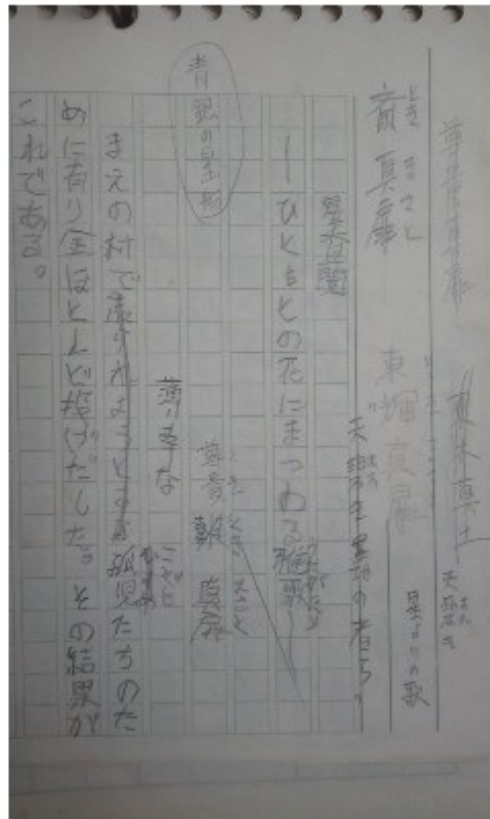
[『闇の左手』 \(違っ...](#)

2016年6月9日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

◎ 隔月刊COBULT 百～二百枚・一単位。要購入チェック。

『フェンテル王家の七恋歌』

- ・ 舞台は特に固定しない。
- ・ つなぎとして正体不明の2人連れ。
- ・ 一の王子妃 ～星華蘭の雅歌～
- ・ 五の王女 ～詩人出奔～
- ・ 七の王子 ～学舎の恋歌～







## 一、翠林 (すいりん)

そもそも杜 (もり) こそが聖域で、王宮など初めはそれを護る外壁にすぎなかったと伝える。

数百年を経た華蘭樹の枝々 (えだえだ) は広大な中庭いっばいを埋めつくし張り交わし、初夏のころ、新緑と呼ぶには日ごとに色濃くきらめく大きな葉を繁らせて、梢 (こずえ) もまちかい樹上の高みは視界のきかない自然 (じねん) の迷宮だ。

「これぞまさしく碧天 (へきてん) の神の御加護だぜ」

敵前逃亡に成功したばかりの少年はちょろりと舌をだしてなむなむと形ばかりの不謹慎な礼拝 (らいはい) をする。

手ごろな枝のつけねにどっかとまたがり懷中に手をつっこめば、とりあえずくすねてきた木の実や菓子の類が、出てくるでてる。

昼食というには気の早い時間帯だが今日はなにしろ朝から忙しかった。

弓だの剣だの馬術だの、いつにも増してしごかれたうえに午後の日課の語学の授業まで午前申日の出前の予定に詰め込まされたのだ。

「今からこんなんじゃ俺の人生どうなるんだ……？」

嘆息しながら暮らすにはまだ若すぎる早すぎる未熟すぎる未 (ま) だ熟 (わか) すぎる十四歳。脳裏に浮かぶのは糧食確保に忍び入った宴 (うたげ) の間で準備に余念のない女官たちの、甘い香りと柔らかな声、まるみを帯びた体の線。

「夏だもんなあ」

めっきり薄着になってしまうから心の臓に悪いのだ。手にした桃香果に妙みょうな思い入れをしそうになり慌ててかぶりつく。

城中一 (いち) と噂にたかい年上の美女の匂いやかなたおやかな胸。

去年の夏には気づきもしなかった赤い口唇のなまめかしさに胸騒ぎのする心の騒ぐ今年になって、ふりかかった境遇は災厄と言っていい。

できすぎた親をもつと子供たちが割 (わり) をくうのだ。

「……けど、協力するって、最初に言っちゃったしい。……」

—「なにを一人でぶつぶつ言ってるんです」—

—と、ここで従兄を登場させると枚数が増えるわね。—

腹がくちくなれば苛立ちもすこしはおさまる。

このまま城外へ抜け出してすっぱかしを敢行してしまおうしょうか、それとも夫大七く戻ってシキタリとやらを甘受するべきか。

律気な長男気質（かたぎ）に生まれつuitたのが運のツキだとばかりに深い吐息がまたもれる。  
生まれつuitての長男気質（かたぎ）がすべての不運の源（みなもと）だ。

ずっしりと肩に重みを感じて深い吐息がまたもれる。

と、その時。

ぎゃあああ————っ!!

うららかな夏の午前の陽ざしを刺し子雑布（ゾーキン）をちぎるまうながごときおたけび悲鳴がさえぎった。

「ひっ姫さまっ、お止（や）め下さいアブアブ危ない～～っ」

侍従らしい老爺（ろうや）のおたけびに何事かと葉むらをかきわけてみれば身をのりだせば。

白と黄金（きん）のかたまりが瑠璃（るり）ひといろの天から降（ふ）ってくる。

それが、《邂逅（かいこう）の宴（えん）》のために正装束で着飾らされた少女だ、と理解するのに一瞬の間（ま）があった。

貴賓室（きひんしつ）のある塔の窓から木立ちのはずれにの張り出した大枝めがけ、成大でも足がすくむセウアルの常人なら足がすくみ目をまわす高みから高さを思い切りよく飛びおりたものらしい。

宙空でぐるりと体をまるめてまるまり一回転、つまさきから樹上におりたつ。そのまま重みで七なる足場はかなり不安定で、すべった、と見えるのは意図してのようだった。

すんと枝にかけた膝を支点に背面へ倒れこんで落下の速度をねじまげる。

上体のふれた反動のままにでかなり離れたとなりの梢（こずえ）に飛びうつってきた連続技は見事という七かないほとんど猿（さる）というしかない。

ほとんど猿だな、あれは」

惜しむらくは把んだその枝それが細すぎた、ということで。

ばきっ

————っ?!

「きゃあ！」

叫んだのは、見ず知らずの少年に抱きとめられて驚いたせいだった。

「慮外者（りょがいもの）、放（はな）しや！」

「おっ……と」

かんだかい童女の声には王者の気迫がある。

真っ赤になって暴れる子供を腕にかかえて枝上をわたる大間少年の平衡感覚も、なまなかなまじな鍛錬で手にはいるものではなかった。

ゆさゆさと揺れる中天の緑の小径（こみち）を一陣の風がふきぬける。【女神の手のかたち】と称される金碧（こんぺき）の葉が陽光の波に踊る。

足の下のはるかな海底でちらつくそれが地表にとどいた木漏れ日の紋様だと気づいて、まうや←救けられたのだと事実にようやく納得したらしい。静かになったのを幹にほど近い大枝に腰かけさせて少年未熟な戦士守護者は内心の冷や汗をぬぐった。

歳月を経た華蘭樹の梢ちかくは見かけよりも折れやすい。のだ。それが他国の刺客ら間諜など

~~を除（しり）ぞけると同時に、こうして子どもだけの逃走経路となっている。~~  
~~同時に三人の体重というのほかなり危険なカケでもあったのだ。~~

『 碧天王家の七恋歌 1 』 星華蘭の雅歌 (1991.秋～冬) 2

2006年6月17日 [連載 \(2周目!・上古神代～水の大陸\)](#)

「御無事でなによりだ、姫君」

「礼はいおうぞ。したが、あれしき」

無用な手出しじゃと、まだ紅みのさす頬のそっぽを向けて、言う。

たしかにあの身のこなしなら多少の危難は自力で解決できたにちがいない。が、~~考える前にか~~  
~~らだが動いてしまったのだから、七かたがないではないか？~~

「それは、すまなかった」

苦笑をこらえた少年はにっこり笑って口ではすなおに謝まり頭まで下げてみせる。

大人ぶった相手の対応に、今のはやはり自分のものいいが礼儀からはずれていた行儀知らずだ  
ったと自覚したのか。

むっ、と困った顔で朱唇をへの字にまげる。

歳のころなら十一、二歳か。

幼なさには似合わぬ豪華な正装束の白絹がみるも無惨にもののみごとにあちこち鉤裂けていた

。

きちきちに結われていた黒髪も荒技のせいで鬘（まげ）が乱れて、小さな手が苛立たしげに留  
めの飾り具をひき抜く。

その落ちかかる漆黒の滝にかこまれた額（ひたい）は雪のように淡く、光を放つ双瞳は、翡  
翠（ひすい）をおもわせる碧緑（へきりょく）。

このあたりではごく普通の黄楊（つげ）色の肌に焦茶の眼をした少年とは、顔だちの彫りの深  
さからして異なる。

「失礼だが、西の方（かた）か」

尋ねると小さい媛（ひめ）はまったいらな胸をはって社交用の笑顔を浮かべた。

きかん気とはいえ、躰（しつけ）はなかなかよろしい。

「わらわは星華蘭（セイカラン）じゃ」

少年は、すなおにおどろいた。

先代の王が跡継ぎをのこさずに亡くなり、《碧天（フェンテル）国の七家》の互選によって新  
しく航（コウ）家の三男が才腕を買われて位（くらい）に就いたのがつい最近のこと。

星（セイ）家といえば新興の王家族などよりよほどの由緒を誇り、むろん至高司政者の椅子も  
青い血の一族にまわるもどるものと思われていた。詩人肌の当主が最後まで固辞しつづけたので  
このたびの政権委譲禅譲（ぜんじょう）とはあいだったが。

その、星家の長姫（おさひめ）の名を聖なる国樹からつけたとは、ひとつづてに聞いたことが  
ある。



「つまりは見合いの席から逃げだしておいでだと」

苦笑の呆れた顔にもなろうというものだ。姫たち乙女たち娘たち姫たちの中でも別格の、王太子妃の第一候補である。

「わらわは学びの齡（とし）にもあいならぬのじゃ」

決めつける声音（こわね）は拗（す）ねるといふより義憤に近かった。

「~~かなわぬ。なんで見も知らぬ者と婚儀を約されては~~」

☆（説明文）☆

それは王子のほうとて同じ、とは、少年……名を海空（かいくう）という……は、云わない。

「しかし慣習（しきたり）だからな」

と、したり顔の年長者をぎりと睨（ね）めつける、童女のほそい腹の虫が、ぐうと鳴った。

肌の薄さにみるまに血がのぼる。

「~~いまだ朝餉（あさげ）もまだなのじゃ。おとなしゅう仕度をさせねば駄目じゃ~~と云うて乳母どもが……朝餉ももたぬ」

「兵糧ぜめとはたしかに卑怯だな」

魔法のように懐中からあらわれた甘菓子に礼もそこそこにかぶりつく。幼なすぎる貴婦人の仕草に、苦笑がもれた。

華蘭樹の名をもつ幼姫は空腹をみたす一方で空海の風体を判（み）ている。

「~~そなたもしや、王子がたの御学友か~~」

「~~はじめは端下の者ぞと思うたが、と続く言葉に、たしかに今日の剣術では三度も地面に倒されたと、湯浴みに行く道すがらで抜けだしてきたおのれのけいこ着姿を見おろす。~~」

「~~たしかに、今年の春に学会に入ったが~~」

「王妃になるのは、おいやか」

「妃（みめ）にはならぬ。所望は將軍職ぞ」

「武芸がお得意か」

「母上は、お好きでないのじゃ」

## 軍籍

西高天（さいこうてん）／西高原（さいこうげん）

航海空（こう・かいくう）

潮可（こう・ちょうか）

流華（こう・りゅうか）



『水の大陸』 ～碧葉国の七恋歌～

2006年4月24日 [連載](#)

.....おっと、ひとつ大事な？伏線のエピソード群を忘れていた.....☆  
(^\_^;)>

これはおそらく独立した小説の形には書かない。  
天才的な吟遊歌人でもあったハユンのアマラーサが、  
旅の行く先々で、人々のリクエストに応じて一曲ずつ  
語り明かしていく.....という、劇中劇の形になる予定。

.....実わ重大な伏線.....、の筈だったのに.....。  
なんでここに書くの忘れてたかな.....?? (^◇^;)?

リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
1 - 3 - 1  
『碧葉国の七恋歌』

<http://p.booklog.jp/book/107606>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107606>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107606>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ